

法政大学法学部教授 犬塚 元

「民主主義」は、正しい政治、のぞましい政治の代名詞である。「民主主義に反する」は無条件に、悪い政治を批判する言葉である。しかし、「民主主義」は、正しい政治のシンボルとして、あまりに曖昧に用いられてきた。

▷民主主義の本来の意味

もともと、民主主義(デモクラシー、民主政)は、王政や貴族政とおなじように、「だれが政治を担うか」にかかわる言葉である。王や貴族でなく、みんなが政治を担う。これが本来の語義であり、それは、一部のメンバーの特権をみとめない、政治的平等の理念である。

ところが、これはあくまで、誰が決めるかという手続きの話である。みんなで政治をおこなっても、古代の民主主義がそうだったように、個人への加害や、権力濫用の可能性がある。

人類は試行錯誤しながら、個人の自由・尊厳をまもり、権力濫用を防ぐために、「自由主義」や「立憲主義」の理念を育んできた。これらは、みんなで政治を担うことを意味する民主主義とはあくまで概念的に区別される。ところが、現代の政治論争において「民主主義」は、正しい政治を表現する代名詞として使われるあまり、実際には立憲主義や自由主義など、ほかの政治的価値を意味する場合も珍しくない。「民主主義」という語のこうしたインフレは、われわれの政治理解を妨げてはいないだろうか。

▷量の問題か、質の問題か

戦後日本でながらく、のぞましい政治の代名詞として「民主主義」という言葉が大きな役割を果たしたのは、日本では前近代が残り、いまだ近代的・民主的な社会でないという歴史理解が一般的だったからである。新憲法下でも民主主義が未発達であると考えた政治学者たちは、「民主主義」の旗のもとに、一党優位体制や、「鉄の三角形」による寡頭支配を批判した。そこでは、民主主義か非民主主義かという対抗図式が、政治の良い悪いを論じる物差しだった。

しかし、のちの世代は、日本はまがりなりにも民主主義国家となったという前提のうえで、日本はどのような民主主義か、どのような民主主義がのぞましいか、という議論を重ねてきた。たとえば、代議制民主主義の問題点を説く論者は、参加民主主義や熟議民主主義という別タイプの民主主義を提唱している。民主主義の制度や理解はひとつでなく、さまざまなタイプの民主主義があるのであれば、単に「民主主義」というスローガンを掲げるだけでは、議論の出発点に立つにすぎない。

▷ポピュリズムと民主主義

近年では、のぞましくない政治を論じるために「ポピュリズム」という概念が広まっている。

ポピュリズムについては、自分たちだけがみんなの本当の代表であると僭称する反多元主義ゆえに民主主義ではない、との見解も有力だが、他方、反エリート・反外国人を説くポピュリズムは、「われわれの政治」を掲げる点において民主主義と無関係でない、との主張も説得的である。ポピュリズムがある種の民主主義のすがたであるならば、どのような政治的価値を大事にする、どのようなタイプの民主主義が望ましいかが問題になる。

少数政治を批判する民主主義の理念は、現在でも依然として意義を失っていない。しかし、自分たちこそ真の民主主義である、と主張するポピュリズムに向かいあうには、「民主主義」という言葉をもちだすだけでは不足する。乱暴な善悪二元論をつくりあげて、敵と味方の対立を煽るポピュリズムの政治手法がのぞましくないならば、なおさらに、民主主義か反民主主義かという単純な図式に頼るのでなく、民主主義を丁寧に吟味し、さまざまな政治的価値の意義を実質的に論じていく必要がある。

いぬづか はじめ 1971年生まれ。東北大学教授等を経て、2016年より現職。専門は政治学史・政治思想史。博士(法学)。主著に『岩波講座政治哲学2』(編著、岩波書店、2014年)等。